

■労働闘争の最中で病に

■スモンは腹痛・下痢、足先のしびれから始まり、下肢全体のしびれや脱力、歩行困難などが起こる神経疾患。1960年代に多発し、原因究明までに感染説やウイルス説が流れ、患者は差別に苦しんだ。後に整腸剤キノホルムが原因と特定され、製薬会社と国に対して対策と賠償を求める訴訟が起こった。

大阪府守口市にある中小企業で労働組合が結成され、私とその書記長に選ばれました。しかし、すぐに工場閉鎖、暴力団の殴り込み等の組合つぶし攻撃にありました。長い争議の末、「書記長の配転以外、組合の要求は全部認める」という勝利解決に至りました（1962年3月）が、それから約4年各部を配転させられ、私は最終的に解雇されました。その闘いのなかで体力的にも精神的にもつかれて病に倒れました。副腎皮質ホルモンがどんどん出てしまふ病気で、顔が膨れあがつて身体の上の方だけ太ってくるような症状が出てきました。1966年3月15日に副腎を摘出する手術を受けました。闘病中も解雇撤回の闘いを続けていて、その仲間たちから励ましをもらいました。

その後、転院し、入院生活が続きましたが、病気は回復に向かっていませんでした。入院中に下痢をして、その時に出された整腸剤を飲みました。その薬を飲むと、一時は良くなりましたが、すぐにまた下痢がひどくなつて、続けて服薬するようになりまし。その時に処方されたのが後にスモンの原因と判明するキノホルムで、私はそれによってスモンを発症しました。

スモンは、神経が侵されていく病気で。どこの神経が侵されるかは、各人各様ですが、一様にあるのは足の底から体の上の方へ痺れが上がってくることです。入院をしていて1967年3月に、ベッドで回診を受けていると、医者が「あなたはスリッパを履いたまま寝ているのか」と言いました。その時に初めて自分がスリッパを履いたまま寝ている、足がまひで履いてるか脱いでいるかという感覚もなくなっていることを自覚しました。それからあつという間にお腹の方まで痺れがきて、排便・排尿の感覚がわからなくなりました。便が出ても自分でわからなないので、ずっとおむつを当てたまま寝ている状態になりました。感覚



▶不当解雇撤回を求めての闘いの頃

生きる

第1回 スモンを発症して

辻川郁子



つじかわ ふみこ / 1929年生まれ。38歳の頃に整腸剤キノホルムによってスモンを発症。薬害スモンの運動に参加し、薬害根絶と患者救済のために活動している。スモンの会全国連絡協議会事務局長

がないはずなのに、お腹の中や足が痛いので、転げまわっていました。医師は、なにが原因かわからなかったもので、うるたえていました。なんの病気かはわからないけれども感染するかもしれない、スモンという病名はその頃にはあつて、どうもそれかもしれないと思つたようです。そして、私にはそのことを告げないで元は結核病棟だった隔離病棟に一人で入れられました。

■隔離病棟での生活

隔離病棟に入れられた私は、人のためになることをしようと思つているのに、人手を借りなければ排便もできない状態になつて、一人で天井を眺めながら、もう自殺しようかと

思いつめました。でも、自殺しようにもベッドにくくりつけられていたので、それでもできませんでした。ただ、点滴を受ける日々が続く、これでは死を待つばかりだと思ひました。自分の病気のことばかり考えて、人と接触しないからこんな考えになるんだと思ひ、医師に他の人のなかになぜ入れてくれないのか、病室を大部屋に代えてくれと頼みました。

その頃、スモンの研究班が大阪にでき、そのトップが市民病院の医師でした。その病院に行かせようと医師が考えたよう、転院することにになりました。私が自分はスモンだと知るのは、数年後の1970年になつてからです。